**【The Black Note】第13話　万里眼の見る未来**

■オープニング

シェラモノローグ「その瞳を持つ者は遠い未来まで見通せるといいます。静かに待っていると持ち主の関わる重要な局面だけを選別し、その行く末を見せるのだと。主と運命の交錯する者たちの未来を見せるのだと。ですから、たくさんの人たちと交流を持つあなたなら、あらゆる未来を手に入れられることでしょう……」

■タイトルコール
デュレ「The Black Note 第13話　万里眼の見る未来」

■本編
□迷夢とシェラは空の上。
　SE：風を切る音。

シェラ（わたしは知っていた。かつてリテール全域を領土に組み込んだという魔法王国の遺跡から見付かったそれを手にした時から……。……堅く閉ざされた万里眼の瞳とココロを解きほぐし、“未来”を知った）

シェラ（幾多の出会いと別れ、裏切りと友情。甦った万里眼との盟約。人に話してはいけない。わたしが譲り渡すと決めたたった一人を除いて、あなたが何なのか教えてはいけない。目玉しかないのに、幼気な表情を持つあなたにわたしは心を奪われた。本当は知っているのに、何も出来ないでいる無力さも、つらさもあった。……今でも、思う。盟約を破棄してでも、行動に訴えるべきだったのではないだろうかと。あなたの裁きを受けようとも怯まず、白日の下に全てをさらせば……）

迷夢「ねぇ、シェラ。さっきっから黙りこくってどうしちゃったの？」

シェラ（……万里眼は全てを見透かす。わたしの行く末も、この世界の片隅で知るもののほとんどいないだろう行く先も。そして、自身の行く末さえ万里眼は知っている。……この娘の手のひらに万里眼は乗っている。わたしが迷夢に譲り渡すと決めたから、万里眼はわたしにそれを知らせたのか。それとも……？　誰の思惑にも寄らず、あなたがそう願ったのでしょうか……？）
迷夢「シェラぁ？　無言はやめてよねぇ？　つまんないしさぁあ。空の旅は楽しくないと」
シェラ「あら、ごめんなさいね。……昔のことを思い出してしまって……。そう、迷夢に渡したいものがあるんだけど、もらってくれるかしら？」
迷夢「なぁに、シェラ？」
シェラ「迷夢、これをあなたに……」

　SE：鎖がちゃら

迷夢「何、その、目玉のお化け見たいのは……？」
シェラ「万里の彼方を見通し、未来を知る道具、万里眼です」
迷夢「万・里・眼？　千里眼じゃなくて？」
シェラ「……千里眼でもいいのかも知れませんね……。しかし、それを作った人は万里眼と名付





けたんですよ。千里眼よりもずっと遠くを見渡せるように、万里眼と……」
迷夢「ふ〜ん？　ま、そりゃいいわ、どうして、あたしなの？　デュレやセレス、リボンちゃんの方があたしなんかよりずっと、ずっと、信用、信頼できるんじゃないの？」
シェラ「……迷夢なら使いこなせるんじゃないかと思って」
迷夢「は〜ん？　だって、そんなの変じゃない？　未来を知る力……というのなら、リボンちゃんの“予兆”だって同じなんでしょう？　それなら、彼にあげればいいじゃない？　あたしじゃなくてさぁあ？」
シェラ「それでも、あなたなのですよ、迷夢」
迷夢「そお……？」

　SE：万里眼、瞬き、くるくる。

迷夢「うわっ！　……瞬きしたよ、こいつ」
シェラ「数ある魔法アイテムの中でも万里眼は特殊な部類に入りますよ……。いわば、一番的を射た言い方は……、恐らく、魔法生物」
迷夢「ちょっと、待ってよ。あ、あたしに生き物の世話なんか出来るわけないじゃない」
シェラ「大丈夫です。迷夢の魔力を少しだけ分けてあげれば、万里眼は満足です」
迷夢「で、これをあたしにどうしろと……？」
シェラ「使い方次第で何にでも化けますよ。万里眼を自在に使えれば、歴史を思うがままに渡り歩くことも可能です。つまり……、先を知ることはそれだけのリスクと責任を知っていながら負うことに他なりません。……万里眼で見えてしまった未来はもう、変えられないからです」
迷夢「それなのに、万里眼には意味があるの？」
シェラ「さあ……。しかし、迷夢はある程度まで見てしまったはずです……」
迷夢「だから、あたし？」
シェラ「ただ、これだけは言えますよ。デュレやセレスには荷が勝ちすぎ、シリアには最初から必要ないですし、レイアのことは……少しだけ見えていましたからね。彼女ではないことは確かでした」
迷夢「シェラって意外に、策士……と言うか、案外ずるいのね？」
シェラ「それ程でも。わたしも老い先長くありませんからね。デュレに渡したアミュレットと同じに、万里眼にも後継者が欲しかっただけかも知れないですよ？　悪意ある者に渡るのだけは勘弁ですから」
迷夢「けど、幾ら悪意があったって、変えられない未来なら知ったからどうなるわけでも」
シェラ「大局が変わらないというのと、些細なことが変化するのは別のことです。変わらない限りは知った事実を利用、悪用が可能。少なくとも、そうやって身を滅ぼした人が幾人かいたことはわたしの知るところですよ。……迷夢なら、そんなことはないとわたしは思って」
迷夢「一つだけ、聞いてもいいよね？　シェラは万里眼を使って何を見たの？」
シェラ「黒い翼の天使がわたしの前に降り立つこと……。それだけです。万里眼がハッキリと見せてくれたのは……。迷夢なら、もっと色々と見られるのでは？　もちろん、知らない方がいい将来も含めて、あなたは知ることになります。極々最近のことから、ずっと何世代も先のわたしたちには触れることの許されない遠い未来まで。迷夢が望めば。ですけどね」
迷夢「万里眼……」
シェラ「その重責にどうしても堪えられない時はわたしの見立て違いですね……。……その時は迷夢の信頼できる誰かに預かり、保管してもらうことをお願いするか……。永遠にさよならしてください」
迷夢「でも、万里眼は自分の行く末でさえ見通してるんじゃないの？　道具と言っても生きてる

というなら、自分の意志を持ってるのよね？　こいつにも主を選ぶ権利があるんじゃなくて？」
シェラ「この子は迷夢を次の主に選んだのですよ。だから、今、この子は迷夢の手のひらに……」
迷夢「決戦がもうすぐ始まる……、万里眼が……あたしに……？（独り言のように

//場面転換
□シメオン、市中にて
SE：トボトボ足音。

デュレ「……千里眼……欲しいですね……？」
セレス「千里眼？　って何？」
デュレ「知らないんですか？　千里眼とは……遠い所の出来事、人の心を直感的に知る能力のこと……よ。全く……」
セレス「つまり、リボンちゃんみたいな能力って事？」
デュレ「まぁ、おおよそ、そんなところでしょうね。多分」
セレス「多分？　デュレが多分だって。お〜、キミが自信なげに言うなんて珍しいよね？」
デュレ「だ、だって、リボンちゃんのことはよく知らないから。彼のことはセレスの方が詳しいでしょ」
セレス「あたしも知らない。あの子さあ、自分のこととなると全然、喋ってくれないんだよね。ついこの間、みんなの前で色々喋ったでしょ？　あれが初めて。何だかんだ、ぶつぶつ言いながらも、四時間も、五時間も喋っていたでしょ。しかも、それなりに楽しそうに」
デュレ「そう、ですね」
セレス「なぁ〜んか、納得できないのよねぇ、あの野郎っ」
デュレ「それじゃ、リボンちゃんがあまりに可哀想だと……」
セレス「いいのよ。あんな奴。バッシュ一筋だったなんて一言も言ってくれなかったし、父さんを知ってるなら最初からそうだって言ってくれても良かったのに」
デュレ「しかし……、今更、悪態ついて、愚痴をたれても始まりませんよ。知ることができただけでも良かったことにしておかないと……。今後、後悔することばかりになるのは請け合いです」
セレス「ぅにゃぁ。もぉ、後悔しまくりなのよ。これから一つや二つ増えたって大したことない。これこそ今更って気がするけど、あたしは高名トレジャーハンター・セレスちゃん。キミは魔法のことなら右に出るものなしのダークエルフのデュレちゃんでしょ？　二人が組めば怖いものなし！」
デュレ「はぁ……。ついさっきまで、死にそうな目に遭ってたのに、何で、こう、緊張感ゼロなのかしら？」

SE：シリアの足音。

シリア「……どこに行ったのかと思ったら、こんなところに……」
セレス「あら、どしたの、リボンちゃん。ホンのちょっとしか経ってないのやつれちゃって」
シリア「……やつれもするだろっ！　——どうせ、絵は……盗られたんだろ？」
デュレ「ご明察です……」
シリア「だからだよ。……お前らを見つけるまで思い悩んでいたんだ。オレの美しい毛並みから光沢がなくなって、抜けたり……円形脱毛症にでもなったらどうするつもりだ」
セレス「どうもしないぃ〜〜」





SE：ごろごろ

シリア「やめろ。いい加減にしないと噛みつくぞ」
セレス「……キミは噛みつかない、絶対に」
シリア「ああ、そうだよ。どうせ、オレは甘ちゃんだからな、何もできんの」
デュレ「本当ですか？　でも、それは置いといて、最初で最後の作戦会議をしませんか？」
シリア「そうだな、そうするか……」
セレス「ねぇ、デュレ？　地下墓地大回廊に行かない？」
シリア「……どうして、お前は言うこと言うこと唐突なんだ？」
セレス「判んない。っていうか、ペーパーダーツの伝言……急に思い出して……。だから、だから、行ってみたら何かがあるんじゃないかなって」
デュレ「……リボンちゃん？　もしかして、久須那の絵はあそこにあるんですか？」
シリア「……ああ、多分な。レイヴンはマリスとつるんでるから。——そう言った人気のないところに封印の絵を持って行き、……まぁ、何を企んでるかまでは計りかねるが、オレたちにとってはあまりいいこととは思えないな」
セレス「……今日のリボンちゃんは妙に他人行儀ね？　さっきまでは燃えて消し炭になりそうな勢いだったのに。どういう風の吹き回し？　もう、絵はどうでもよくなっちゃったんだぁ？」

SE：シリアの尻尾をぎゅう

シリア「コラっ。この悪戯盛りのお転婆娘め。絵がどうでも良くなる訳はないだろ？　あれはシェイラル司祭から託された大切なものなんだ。オレたちの……お前たちの未来と言っても過言じゃないんだ」
デュレ「わたしは判っています。だから、セレスのことは放って置いてもいいですから」
セレス「ちょっと、ちょっとぉ。それは非道すぎるんじゃないのぉ。デュレぇ？」

SE：セレス、デュレをつつく。

デュレ「やめなさい。セレス。やめないと、リボンちゃんが噛みつくくらいじゃすみませんよ？」
セレス「あ〜、しゃあないなぁ。じゃあ、地下墓地大回廊ってどこにあるか、リボンちゃん、知ってる？」
シリア「知ってはいるが……」
デュレ「何ですか、その、歯切れの悪い言い方は？」
シリア「場所は知っているが、入り口を知らないってことだよ」
セレス「何ぃっ！　何でキミが知らんのだっ！　だって、地下墓地って確か、聖職者の墓場でしょ？　シェイラル……さんとか、レルシアぁ……さんとか、その他諸々、シェイラル一族のみんなというか、協会に関わったのはそこで眠ってるんでしょう？」
シリア「いいや、シェイラルの一族はそこには眠っていない。エルフの森に埋葬されているよ」
デュレ「何故……ですか？」
シリア「何故……かな？　シェラに聞けばよく判ると思うが……。シェイラルはテレネンセスの出身。レルシアもそうだろう。……オレはよく知らないが、シェイラル一族は協会レルシア派は協会の地下墓地に入らなかった……。ま、色々複雑な事情があるのさ」
セレス「まーいいけど……、何か、こう、釈然としないのよねぇ……」
シリア「じゃあ、シェイラル一族のみんなはジーゼと仲良かったからエルフの森で眠っている。

と言うことにでもして、取り敢えず、納得しておけ」
セレス「う〜。……あら？」

SE：足音。

デュレ「――サム、リボンちゃんと一緒じゃなかったんですね？」
サム「あぁ？　いねぇ、いねぇと思っていたらこんなところにいやがったぜ。しっかしよぉ、てめぇら、しけた面の雁首をそろえて何やってるんだ？」
シリア「サム？　どこに行ってたんだ？」
サム「それは俺の台詞だろ？　てめぇ。腕から下りたと思ったら、とっととどっかに行きやがって。丸一日、レイアを探す羽目になったかと思えば、今度はてめぇだぞ？　最低だ」
セレス「じゃあ、最低ついでに地下墓地まで案内してもらおうかなぁ。キミなら知ってるでしょ。協会魔法騎士団長・サム閣下どの？」
サム「はぁ？　状況がよく判らないんだけどよぉ、だれか説明してくれない？」

//場面転換
□地下墓地大回廊に向かう。デュレセレ一行。
SE：足音、ぞろぞろ

セレス「どうする？　デュレ」
デュレ「どうするって……、どうして欲しいんですか？　セレスは」
セレス「あたし？　……あたしは、誰にも死なないで欲しい」
デュレ「ですね。今度のことで目指す目標ですね。けれど、それはきっと究極の目標になります」
セレス「判ってる。……けど、少なくともみんな一緒にリボンちゃんのうちに戻るんだからね。リボンちゃんの仲間たちを取り戻すんだから……ね」
デュレ「サム？　もう、大分、歩いていますけど、まだ着かないんですか？」
サム「――墓地はさっきからずっと足下なんだが、入口が遠いんだよ。本来は大聖堂から地下にはいるようになってるんだが、てめぇらじゃそこから入れる訳がねぇだろ。だから、古い作業用の通路から潜入しようと考えてる訳だ。警備なんて、してねぇと思うし、楽勝……のはずだ」
セレス「何よ、その妙な間は？」
サム「警備はいなくても、結界くらいはあるだろうってことだ」
セレス「……この下にお墓があるなんてあまり考えたくないんだけど……」
サム「フツーはそう思うよな。それがちょっとした狙い目でもあるんだが……」
デュレ「莫大な建設費がかかっているでしょうね。墓地の上は民家……と言うワケにもいかないでしょうから、大規模な庭園に仕立て上げて市民の憩いの場として解放？　他地域では類を見ないと思うし……、それよりも地下墓地の存在自体が歴史に残っていません……」
サム「なら、協会の目論見は大成功と言えるんじゃないかな。遺跡泥棒や、墓荒らしに遭わずに済むだろう？　きっとな。尤も、お偉いさんたちがそのつもりでそういう風にしたかは定かじゃねぇが、後世にここを何かに利用しようと考えているらしい」
デュレ「そんなものでしょうか？」
サム「ホラ、入口はそこ」
セレス「けど、鍵が……。へへっ！　ピッキングマシン、ここはあたしの出番かな？　ちょぉっと、待ってよぉ。どんな難しい鍵でも一分あれば、イチコロだからね」





SE：鍵をこしょこしょ。

サム「あ……」
デュレ「いいんです。鍵はすぐに開きます。それに……元気になったし、折角、見つけた仕事を取り上げてしまうのは可哀想です。判りますよね？　サム」
サム「判るけどよ。遠回しに役立たずと言われてるみたいでセレスが不憫だな」
デュレ「そんなことはありません。……あの娘がいないとわたしはダメみたいです。魔法は大したことないし、おバカだけど、行動力は随一です。危ない局面はあの娘のお陰で幾度となく切り抜けてきました。……けど、本人には絶対言わないでくださいね。すぐ、調子に乗るから」
サム「普段はいがみ合ってるくせにな」
デュレ「それはあなたと久須那さんと大差ないと思うんですけど……ね？」
サム「なるほど。言わんとすることは判るが、俺たちを例に挙げないでくれ」

SE：カチャン……。

セレス「あ・い・た♪　どうする、これ？」
サム「お〜お、妙に活き活きしちゃって。鍵なんか捨てちまえ。後から、迷夢やバッシュが来るだろ？　――それに鍵なんか、どうせ無意味になる。行くぜ」
デュレ「――特に秘密という訳ではないようですね？」
サム「わざわざ、薄気味の悪い墓場に行こうなんて物好きは少数派ってことだ」
セレス「けど、あんなすぐ開いちゃう鍵だけって、かなり不用心なんじゃない？」

SE：建物の中に進入。
SE：鍵をポイ。

サム「トレジャーハンターが狙うようなお宝はねぇんだよ」
セレス「あーそう。あれ、リボンちゃん？　リボンちゃんは来ないの？」
シリア「先に行ってろ。すぐに追いつく……」
セレス「でも……」
サム「放っておけ。心配しなくても、そのうち来る。そうするしかねぇんだから」

SE：近づく足音。

バッシュ「どうした、シリア。見上げたまま立ち尽くしたように……？」
シリア「バッシュ……。――レイアはどうした？」
バッシュ「診療所に預けてきた。あたしが何も言わずとも、シリアは答えを知ってるんじゃないのか？」
シリア「……まぁな。レイアとは長い付き合いだった……。バッシュには感謝してると」
バッシュ「感謝される筋合いはないな」
シリア「そう言うなよ」
バッシュ「それより、シリア。行くんだろ。地下墓地」
シリア「知って……る、のか？」
バッシュ「シリアくんが思っている以上に。きっとね」

SE：バッシュ、リボンを抱っこ。

//場面転換
□地下墓地大回廊にて。

セレス「デュレぇ。松明か、ランプか何か、明かりになりそうなの持っていないのぉ？」

SE：階段を下りていく音。そして、ライトニングスペルの発動の音。

デュレ「……ライトニングスペル」
セレス「魔法って、便利よねぇ。最近、つくづくそう思うんだわさぁ」
デュレ「そう思うんだったら、きっちり座学アンド修行をしてください。今はまだ、いいですけど。将来に渡って、魔法を使えないエルフと恥を撒き散らすのはゴメンですからね」
セレス「へ〜へ、善処いたしますわ。だから、そんなに怖い顔をして睨まないでもらえるかしら？」
デュレ「それこそ、善処いたしますわ」
サム「――ここが、地下墓地大回廊だ」
シリア「想像していたのよりもずっと広いな……。あの地下室の数十倍はあるか……」
サム「余裕であるだろうな。基本的にそこいらに適当に見えている墓石は司教クラス。レルシア派以外……と言うか、その血統以外の歴代大司教さまはもっといい場所で惰眠をむさぼってるぜ。教皇さまはこんな薄暗いところで、おねんねしてねぇ。ここはそう言う場所だ」
セレス「しっかし、薄気味悪いよねぇ。あたし、こお言うところ苦手なのよ。せめて、もっと明るくならないかな？」
サム「あんまり明るくすると、見たくないものまで見えるから、よしとけ。だが、このだだっ広いところから、封印の絵を見つけ出すには至難かもな」
シリア「イヤ、そうでもなさそうだ」

SE：サスケと久須那のシルエットスキルが歩いてくる。

サスケ「親父ぃ！　レイヴンやマリスが来る前で助かったぜ」
久須那「思ったより、早く見つけたな、どうしてだ？」
サム「あのな、てめぇはもう少し素直に喜べよ。折角、見つけてやったてぇのに文句あるかっ」
久須那「何だと？」
シリア「コラ、そこ。いくら無事に会えて嬉しいからってな、いきなり痴話ゲンカを始めるな」

SE：デュレ手紙を差し出す。

デュレ「探す間でもなく、久須那さんを見つけられたのはこれのお陰です」
久須那「……セレスへ、1292年5月24日。地下墓地大回廊にて待つ……？」
デュレ「久須那さんの絵がここに持ってこられる確証はなかったんですけど、セレスの野性的且つ動物的な勘がここに来るようにと告げたものだから……。たまには役に立ちますよね、セレス？」
セレス「『たまには』は余計よ。『いつも』といいなさいよ」
サスケ「こいつら、緊張感が足りないな……」
シリア「やっぱり、お前も思うよな。何故か知らんが、どんな危ない時でもこうなんだ」
久須那「それはいいさ。その紙切れの日付は明日になっているようだが、どうして今日来たんだ？デュレがそれを後生大切に持っているくらいだ。信用できる人からの伝言なんだろう？





どたばたがあって、昨日の今日だ。先手を打つのが常套手段と言っても……。どうしても、やってしまいたいのか……？」
デュレ「……久須那さんの思ったとおりです」
久須那「やはりな。ちょっとやそっとじゃ、諦めないだろうとは思っていたよ。――しかし、やめておけ。これをやってしまえば、お前はお前が救いたいと思うものを救えなくなる。判るか、魔力は温存しろ。駆け出しとは言え、魔術師のお前なら理解できるはずだ」
デュレ「久須那さんの意見は意見として心に留めておきます。でも、やらなければいけないんです」
久須那「成功しないと判っていても？」
デュレ「失敗するから、より一層」
シリア「久須那、諦めろ。こうなった以上は何を言っても無駄だぞ」
久須那「そう簡単に言わないでくれ、リボンちゃん。確実性ばかりを求める訳じゃないが、リスクは少しでも少ない方がいいんだ」
デュレ「覚悟は出来ています」
セレス「あたしはそのぉ〜、まだなんだけどぉ」（もごもご
久須那「わたしと関わる連中はどうしてこんなに生き急ぎたいんだろうな？」
サム「だけどよ、死に急ぐ輩よりずっといいと思うぜ、俺は」
久須那「それは認めるさ。しかし、ここで死なれては後味が悪い。はっきり言って、冗談じゃないぞ。いなくなってしまう方はいいかもしれない。しかし、残された方はどうしたらいい？」
サム「案ずるな。誰も残らねぇさ、今度は」
久須那「もう、どうにでも好きにしろ。だが、どうなってもわたしは知らないぞ」
セレス「ねぇ、やっぱさ、必要な魔法も手に入れたんだから、大人しく帰ろうよ？」
デュレ「往生際が悪すぎます、セレス。――諦めなさい」

//場面転換。
□迷夢、独り芝居？

迷夢「ねぇ、万里眼？　喋れる？　喋れない？　めんたまだけじゃ喋れるはずもないか。ねぇ、キミに何か可愛らしい名前はないのかな？　つけてもいいかな？　万里眼なんて味も素っ気もない名称じゃなくてさ、愛くるしくてギュウって抱きしめたくなっちゃうようなステキな名前、欲しくない？」
ロミィ「……」
迷夢「そうねぇ……。ロミィって言うのはどうかしら？　キミはきっと女の子だ」
ロミィ「……」
迷夢「さてねぇ、あたしも始めさせていただきましょうか」
ロミィ「……」
迷夢「大丈夫だよ。ロミィ。キミがどんな未来を見せようとしてるのか、知らないけど、あたしは負けない。あたしが負ける時は世界が終わる時よ」

SE：迷夢、ごそごそと準備。

迷夢「さぁて、準備完了。心と身体の準備はよろしいかしら？　光に住まう闇の言霊ちゃん」

SE：アイテムに光がともる音。

迷夢「……準備、良くないのかしらね？」
言霊「何ようだ……」

　SE：闇の言霊、現れる音。

迷夢「おかしなところで、ドキドキさせないでよ。来てくれなかったらどうしようかと本気で考えちゃったんだから。無駄に使えるエネルギーはあんまりないんだから、頼むよ、ホントに」
言霊「……汝が望むは……」
迷夢「前と一緒よ。天使の住む世界とこっちの世界の境界面の修復。今度は魔力が足りないってことはないと思うんだけど、どうかな？　シメオン全市の魔力をキミにあげるわ。これなら、前みたいに千年だけってことはなくて、半永久的に大丈夫のはずだよね？　……大丈夫って言いなさいよ。でないと、許さない」
言霊「ゆ、許さないと言われても困るのだが……」
迷夢「あ～、そんなに狼狽えなくてもいいから。千年前の失敗は二度としない。今度は大丈夫よ。キミに必要な魔力はちゃんと確保した。けど、シメオンからの魔力の吸引はギリギリまで待って欲しいんだ」
言霊「……？」
迷夢「シメオンの魔力をキミに渡す前にどうしてもしなくちゃらならないことがあるの。その前にさ、この魔法がばっちり決まるか、確認をとりたかったの」
言霊「――万事、了解した。――境界を修復するに魔力は充分。――実行する時、改めて、我を呼べ」

　SE：闇の言霊が消える音。

迷夢「――ねぇ、ロミィ。キミはどっちが勝つ方に賭ける？」

//場面転換
　□地下墓地大回廊

デュレ「……封印の破壊を……始めましょう……」
サム「ま、やれるだけ、やってみ。どうにかなっちまった場合は総員退避。それでいいだろ？」
セレス「何、呑気に言ってるのよ。あたしの見立てじゃ、退避できたらもっけの幸いよ。いいこと、デュレの魔法は半端じゃないの」
サム「は～。じゃ、シリア、その封印破壊魔法ってのはどんなんだ？」
シリア「――知らん……」
サム「……？　はぁ……。フェンリルのてめぇが知らねぇ？　……てめぇ、何て言うか、イメージ的には全知全能そうに見えるのにな。魔学にも、何にでも学問の全てに通じ、知らぬことは何一つねぇっ！　俺はそう思ってたが……、違うのか？」
セレス「キミにも判んないことって、やっぱり、あるんだ。そゆこと聞くと安心するな。うん」

　SE：セレス、シリアをポフポフ

シリア「悪かったな。無学でよ」





デュレ「いつまでも、バカやらないでください！」

　SE：ごちん。

サム「……てめぇが本気になると、結構、怖いのな」
デュレ「あなたもいつまでもそんな調子でいたら、容赦しませんよ」
サム「――いいや、俺は久須那で慣れてるから……」
デュレ「へらへらしないっ、そこ！」
セレス「う～～。いったいよぉ……。頭蓋骨が陥没したらどうするのよぉ。――そんなにカリカリしなくていいから、とりあえず、“試し”なんでしょ？」
デュレ「――そうですね。（深呼吸）闇の魔術師・デュレの名に於いて漆黒の闇の深淵のさらなる深みにアルものよ。我が呼び声に応え、闇の奥底よりうつしよへの道筋を開け」

　SE：変な音？

デュレ「よりて、我と束の間の盟約を結び、我の言霊を現へ導く。漆黒の闇の深淵のさらなる深みにアルものよ。封印の絵に宿りし光を滅し、闇に沈む孤独な光点へ。キャンバスに封じられし魂をうつしよへと解放するものなり！」
セレス「あれれ～？　幾ら何でも、あれってことはないよねぇ？」
デュレ「ダメみたいです……。わたしだけでは魔力が足りません……。それとも……どこか、呪文を間違って覚えてるのかしら……？」
セレス「ねぇ、リボンちゃん？　中途半端なことをすると、向こう側から魔が雪崩れ込んだり何かして大変なことになるんじゃなかったっけ？　……でも、これは？」
シリア「封印破壊魔法の実行に必要な魔力の閾値があるんだ。その一線を越えられなければ……こうなる」
セレス「……？　と～言うと？」
サム「つまりよ、ここに来るまでに消耗しきっちまったってことだ。大きな魔法をやってのけるには魔力のストックが足りない。散々、大見得を切っておいてこの様たぁ情けねぇなぁ。デュレ？」
デュレ「……。ホ、ホントのことだけど、あなたに言われると腹が立ちます！」
サム「それだけ元気がありゃあ、次はどうにかなるかもな。それにへこんでる時間なんてねぇんだ。落胆しねぇで“失敗したのはもっけの幸い”とよ、魔力をためるんだ」

　SE：サム、デュレの髪をくしゃ

久須那「……。サム……。デュレにちょっかいを出すと、わたしが許さないぞ」

　SE：近づく足音。

マリス「やはり、来ていたか……。これも因果応報。時の理の中のことなんだろう？　シリア、お前に言わせれば」
シリア「そうであり、同時にそうでない」
マリス「どういう意味だ？」
デュレ「未来は万人に開かれたものだから……。そうでしたよね。リボンちゃん？」
シリア「そうであって欲しいという願望だよ。無論、ほとんどの事象では“開かれたもの”だが……、マリスについては適用不可かもな。この時代とは不可分なほど関わりを持っている。

個人のささやかな生活ではないだろ？　レベルが違いすぎる」
セレス「だったら――！」
シリア「話は最後まで聞け。開かれていなくても閉じてはいない。こじ開ける余裕はどんなときにも存在してるんだ。ただ、その難易度が違うだけ……今度は最難関だな……」
セレス「判ったよ、リボンちゃん」
デュレ「でも、どうして、こんなに面倒くさいことをわざわざ……？」

SE：それぞれが臨戦態勢に入る音。

マリス「そんなに知りたいか……？　貴様らに絶望を与えるため……。そして、返してもらおうっ！」
デュレ「わたしたちに希望はあっても、絶望はあり得ません」
マリス「それはどうかな？　久須那の絵を消滅させれば、貴様らから全てを奪える」
デュレ「――！　……勝利を確実にするためなら、あなたは何も言わず久須那さんの絵を破ってしまうべきだったとわたしは思います。……少なくとも、わたしがあなたならそうします」
マリス「出来ないさ。久須那は大切な友だった。――貴様らがいなくなれば、久須那はわたしの元に帰ってくる。それが先だ。絵を破くことなどいつでも出来る」
アルタ（折角、明日の日付にしたのに、お前は来てしまうんだな……、セレス。ならば……、これでいい……。これは変えられない運命なんだ。バッシュ。……俺はお前の死を受け入れて、静かに暮らしていく他ないんだな……。しかし……）
アルタ（……止められるか……）
久須那「――マリス……、レイヴン、もう、諦めろ。――このリテールに天使の世界を作ろうなど、意味をなさいない。リテールに天使は四人……。こっそりと異界に帰らなかったものを数えたとしてもせいぜい十数人しかいない。それでどうなる？」
レイヴン「シルエットスキルはすっこんでろ」
久須那「断るっ！　こう言う時こそ、わたしの出番だ。……判るだろ……？」
デュレ「でも、久須那さんを盾に使うなんて、出来るはずがありません」
久須那「使えるものは何でも使わないと勝利を掌中にすることは出来ない。判るな」

SE：カツンと足音。

迷夢「ねぇ……。久須那のシルエットスキルがイヤだってんなら、あたしが相手をしてあげようか？」
レイヴン「迷夢？　……ここで会ったが百年目というやつか？」
迷夢「さぁあてね？　どっちにしても、ちゃちゃっとやってみない？」
レイヴン「……お前ごときには絶対負けない」
デュレ「迷夢っ！　あなたの支度は済んだんですか？」
迷夢「キミは人の心配よりも自分の心配をした方がいいよ。あたしに手抜かりはない。ここに来るまでにちゃんと全部を片付けてきたらから、安心してていいよ。あとはマリスとレイヴンをどうするか。あたしにはもうそれだけのことだから」
レイヴン「それだけの事が最難関じゃないのか？」
迷夢「ま、ね、けど、悪いんだけど、キミには楽勝よ、あたし」
レイヴン「……」
迷夢「ほうっ！　やる気満々。相手に不足なしっ！　って顔かしら？」
レイヴン「違う、オレは不満だ。迷夢とやり合うくらいなら、レイアとやった方が手応えがある」
迷夢「それは――どうかな？　さあ、かかっておいで。おねぇさまがキミを剣のサビとしてくれ





るわ。――もしかして、――あたしが怖い？」
レイヴン「何だって？」
迷夢「だから、あたしが怖いんでしょ？」
シリア「ま、あっちは迷夢に任せておく……。マリス、いい加減に諦めたらどうだ……。天使の住む世界に恒常的な扉を開かなくても、他に天使たちがいなくとも、……お前なら、ここで上手くやっていける……」
マリス「――わたしが欲しいのは心の平安などではない」
久須那「しかし、お前が望んでいるものは異界への出入り口や、天使の地位向上、国をつくるとかそんなことではないはずだ」
マリス「ならば、お前は何が欲しいっ！　とでも言えばいいのか、久須那！　お前はいつも、そうやってわたしの邪魔をする。利いた風な口をきくな！　貴様にわたしの何が判る。……やはり、会おうとなどと思わずに地下牢で葬った方がよかったようだ」
久須那「そうできなかったのはお前に未練があるからだ……」
マリス「ああ、そうさ。わたしはお前に未練がある。そうでなければ、このわたしがどうしてお前などにすがる必要がある。――お前はわたしが持ってないものを持っている。わたしがどれだけあがこうと決して手に出来ぬものだ。だから、わたしはお前の手を放したくなかった。例え、まやかし、幻だとしても、お前と共にいられれば全てを持つことが出来た」
久須那「哀れだな……」
マリス「お前にだけは言われたくないっ！　――くっ！　わたしの前から永遠に消え失せろ！」

SE：マリス、久須那を突き飛ばし。

マリス「こいつを切り裂けば、何もかもお終いだ。――わたしの思い描く未来が始まる……」
シリア「し、しまった」
デュレ「ダメっ！　それを失う訳には……」

SE：剣を構える

セレス「マリスっ！　それはキミには譲れないんだっ！」

SE：セレス、飛び出す。

マリス「何だ、貴様はっ！」
バッシュ「セレス！」
デュレ「セレス！　いやぁぁぁあぁっ！」

SE：バッシュ、走る。セレスを突き飛ばす。

セレス「母さぁぁあんっ！」
バッシュ（……こういう……ことなんだ。アルタはこれを止めたかった……。だから、セレスを遠ざけようと……）
セレス「バァァァァッシュ！」

SE：剣をふる音。バッシュ、絵とマリスの間に立ちふさがる。

バッシュ「この絵をお前に渡すわけにはいかないんだ。セレスのためにも……」

マリス「それがどうした！」
セレス「母さんっ！　そんな、母さん！　やめてぇぇぇっ！」
バッシュ「うああぁああぁぁぁああ」
アルタ（だから、言っただろ？　お前がバッシュを殺すんだと……）
セレス「あ……、あ……ぁぁ……。ダメ、母さん――、その絵は……」
シリア「セレぇス！」
サム「セレス！　何をやっている！」
セレス「母さん……、母さん！」
マリス「わたしの邪魔をするものは何もかも消え失せろ！」

　　SE：サムの駆け足。

デュレ「セレス、逃げて。逃げて――っ」

　　SE：剣が交錯する音。

サム「まだ終わっちゃいねぇんだぜ。死にてぇのか、てめぇは」
デュレ「サム……」
マリス「死にたいのだろうさ、そいつ。毎度毎度、思うが、そんなガキみたいな集中力でよく今まで生き長らえたな。……不思議だ」
サム「はんっ、俺たちの人生はてめぇと違って幸運に彩られているのさ」
マリス「そうか……。では、その幸運も今日までだな。約束したばかりだ。貴様らから全てを奪い去る」
サム「おい、シリア。その役立たずを早くどこかに連れて行け。それじゃぁ、餌食だぜ」
シリア「ああ」
マリス「茶番はお終いだ。貴様らまとめて、地獄へ堕ちろ。天空に住まう光の意志よ。我が右腕に宿り、全てを滅する破壊のパワーを体現せよ」
デュレ「みんな、ワタシのところに集まってください」
マリス「……何をする気だ。貴様は。喰らえ、光弾！」
デュレ「――我らを悪しき精霊使いより守護する結界を求む」
レイヴン「マリスっ！　それは結界だ」
デュレ「特化結界っ！」
マリス「だから、何だ。たかが小娘ごときの結界に後れをとるようなわたしではない」

　　SE：魔法の轟音。

デュレ「うぁあっ！　サム？　リボンちゃん。誰か、魔力を貸して……」
サム「……結界魔法は魔力の波長……と言うか、馬が合わないと効果を得られないぜ。恐らく、俺やシリアじゃ、逆に消耗を早めるだけじゃねぇか？　やれるのは……一人しかいねぇぜ」
デュレ「――セレス……でも……」
セレス「――母さん……、うぅぅ……、母さん……」
シリア「セレス……。泣くのは後にしろ。今はここを切り抜けることだけを考えるんだ」
セレス「……」
シリア「セレス」
セレス「――簡単に言ってくれちゃって、キミは……。バッシュはあたしの母さんなんだ。ただの仲間と違う。キミたちとバッシュは違うんだっ！」





シリア「ああ、そうだな」
セレス「どうして、怒らないのさ……。どうして、キミはそんなに優しいんだっ」
シリア「やさしくはないさ……。やることは判ってるだろ……？」
セレス「うん……」

　　SE：セレス、歩く。そして、デュレの手の上に。

デュレ「……？　セレス？」
セレス「何も言わないで……。――あたしの魔力じゃどんだけ頑張れるか判らないけど、ないより、ちょっとはましだよね？」
デュレ「何とか、保ってる間に次の作戦を考えないと、セレスの助力を無駄にしないように」

　　SE：剣が飛んでくる。

マリス「誰だ！　邪魔をするのは」
迷夢「えへへっ！　あたし、あたし。ゴメンね、すっぽ抜けちゃってさぁあ？」
マリス「……貴様。よくもぬけぬけと……」
迷夢「だぁって、ねぇ？　デュレやセレスが負けちゃったら困るのよ。あたしが。ね？」